

安田 康

1. アフリカにおけるこれからのIPM（害虫管理）（講師：東京農工大学農学部
八木繁実氏）

気候ばかりでなく、動物・人間・植物に関しても、最も多様性に富んだ大陸、アフリカにおいて安定した食糧の生産を確保していくためには、複雑な農業戦略が必要とされる。農業経済人口75%以上という、大部分のアフリカ諸国では、トウモロコシ、ソルガム、ムギなど各種穀類の生産が72%を占めるほか、キャッサバ、バナナ、コーヒー、棉などが栽培されている。ユニークな国際的研究機関、国際昆虫生理生態学センター（ICIPE）における研究分野の一つに、作物害虫プログラムによるIPM（害虫管理）がある。特に、トウモロコシ、ソルガム、マメ類を加害するズイムシ類が重要であり、混作体系、耐虫性品種の育成及び生物的防除の研究が行われていて、多くの研究成果が得られている。アフリカのような熱帯・亜熱帯地域に先進国の農業技術をそのまま導入することは、生産性を高めるどころか、かえってその地域の生態系、さらには文化をも破壊する危険性がある。その地域に適合する技術開発・技術協力が肝要である。

2. ヨーロッパにおける植物保護剤の市場—西ヨーロッパにおける殺虫剤を中心として—（講師：住友化学工業㈱ 大内晴氏）

西ヨーロッパの農業政策は、過剰生産穀類問題に起因する財政問題及び穀類消費そのものの頭うち傾向から、その改革が迫られており、麦類の減反政策もその一環として位置づけられている。自給率達成穀類の生産を抑え、特に飼料の海外輸入依存度を下げるために、麦類の裏作として油糧種子（大豆、ヒマワリ）の栽培が奨励されている。西ヨーロッパ全体の殺虫剤市場は9.25億ドル（全農薬市場の約21%）である。各国の全農薬における殺虫剤の使用比率は毎年ほぼ一定していて、その使用は果樹分野で最も高い（全主要作物の40%以上）。スペイン、イタリアにおける殺虫剤の使用割合が高く、フランスが中位で、西独、イギリスでは低い。フランスにおけるトウモロコシ用のカーバメイト剤、イギリスでの麦類用のピレスロイド剤の使用が目立ち、西独では甜菜・野菜分野での有機リン剤の使用率が高く、イタリア、スペイン

では柑橘を含む果樹分野が最も重要である。全般的に、特にピレスロイドの市場の伸びが目立つ。EC各国の農薬の安全性・環境保護に関する規制が一段と強化されるなかで、総じて、西ヨーロッパにおける殺虫剤市場はここ数年の間、質・量共に大きな変化はないといえよう。

3. 東南アジアにおける雑草防除の現状と問題点—タイを中心として—（講師：理化学研究所 百武博氏）

東南アジアでは、国々によって諸々の条件が異なるが、小農の多い稲作社会を形成している一方では、大土地所有、プランテーションが存在している。タイ国では、コメは主要な経済作物であり、移植栽培や深水栽培などの作付面積は著しく大きく、次いでトウモロコシ、ゴム、キャッサバ、サトウキビなどが栽培されている。水稻栽培の強害雑草には、イネ科、カヤツリグサ科、広葉及び水生雑草があり、特に問題化しているのが雑草型野生稲である。全般的にみて、同国の除草剤の利用面積はまだ少なく、大規模経営が一部分存在するゴム園、パインアップルや企業農業などでは除草剤が使用されているものの、その有効性が十分に生かされていない。しかし、雑草防除の重要性から、除草剤導入に対する関心は高く、最近の農薬輸入量は確実に漸増傾向にある。2・4-D、パラコート、トリアジン系、尿素系などの輸入量が多く、水稻作除草剤の使用も増加している。雑草研究機関の充実とタイ雑草学会を中心に活発な学会活動が最近、特に注目されている。